

「湯浅党城館跡」

湯浅城跡・藤並館跡」が

新たに国指定の史跡に その2

「一門」湯浅氏の拠点 湯浅城跡

湯浅城跡は、湯浅町と有田川町にまたがる青木山（標高77m）に立地しています。青木山は、北側が急傾斜となっており、南側から西側は山田川が流れ、天然の要害と言える場所です。湯浅氏の始祖とされる湯浅宗重が築城し、それ以降は湯浅本宗家（始祖からの直系の家系）の軍事拠点として存在したものと伝承されてきました。発掘調査の結果、城内の最も大きな平坦面は鎌倉時代後期に谷を埋め立てて構築していたことが判明し、湯浅党が権勢を誇った時期に城館の形成と本格的な利用が開始されていたことが分かりました。この平坦面では鎌倉時代から南北朝時代にかけて4回以上の整地と礎石建物の構築が繰り返し行われており、火災によって建物が焼失していることも確認されました。また、茶道具に使用された土器や陶磁器などが出土していることから、単に戦時における要害の城とい

うだけではなく、饗宴や儀礼的な場としても利用されていたと考えられています。

「他門」藤並氏の拠点 藤並館跡

藤並館跡は、有田川左岸の河岸段丘に立地しています。地元では「土居の堀」と呼ばれ、四方に残る土塁と南側を除く三方の堀に囲まれた方形区画が良好に残り、近畿地方でも有数の保存状態を誇る平地城館として知られています。発掘調査によって、現存する土塁の下部から鎌倉時代後期に遡る土塁が検出され、湯浅党と同時代の拠点であることが確認されました。この地域における鎌倉時代の在地領主は藤並氏のみであることから、この城館は藤並氏の重要拠点であったと考えられます。館の基本構造は、藤並氏の時代に形成された後、室町時代から戦国時代にかけて堀や土塁の改修を繰り返しながら利用している状況が判明しました。



湯浅城跡 焼土面と礎石



藤並館跡 鎌倉時代の土塁